

短期海外研修から参加者は何を学んでいるのか

－異文化コミュニケーションの観点から－

藪田 由己子

What is the Outcome of Short-term Study Abroad Program? Perspectives of Intercultural Communication

Yukiko Yabuta

本研究は、研修参加者が提出する報告書の記述を質的に分析することにより、短期海外研修の学びを明らかにしようとする試みである。9日間の台湾研修の参加者29名の記述を異文化コミュニケーションの観点から分析したところ、異文化交流や外国語学習に対する動機の向上と、新しい知識の習得による考え方の変化が観察された。また、認知、情動、態度・行動の異文化コミュニケーション教育の観点では、3つの領域で学びがあることが確認された。

キーワード：異文化コミュニケーション，異文化間教育，短期海外研修，WTC，質的分析

1. はじめに

2013年5月、教育再生会議は安倍首相へ「これからの大学教育の在り方について」の第三次提言を提出した。その柱の1つが「グローバル化に対応した環境づくりを進める」であり、大学教育においては、グローバルな視点を持って活躍できる人材を育成することが急務であると述べている。そのための施策として、大学教育環境の整備、日本人留学生の倍増、日本人としてのアイデンティティを高めて日本文化を世界に発信する、などが掲げられている。このような状況の中、多くの高等教育機関では国際交流活動が行われている。大きくはキャンパス内での交流活動、外国人留学生の受入事業と日本人留学生の派遣事業などがあり、派遣事業は半年以上の長期、それ以下の短期と期間が異なる。本学においても、半年間の Semester 留学と、8日間から15日間の短期海外研修を実施している。長期間の留学では、目標言語でのコミュニケーション力の習得、異文化適応力、学習意欲の向上など、本人も実感でき、学位の取得や語学力など数値で表される目に見えた成果があるが、短期研修でははっきりとした成果が見えにくい部分もある。藪田（2011）では、9日間の韓国文化研修において、考え方、感情、行動の3つの領域の変化における調査を実施したところ、短期海外研修は、参加者の考え方と感情に変化をもたらすことがわかった。研修参加者は口々に「行ってよかった」「有意義だった」「新しい文化を知れた」と語り、海外研修に対して肯定的な感情をもっているが、実際彼らは何を学び、得ているのだろうか。

本研究では、参加者が書いた海外研修報告書の記述を質的に分析することにより、海外研修を通して参加者が得ているものを、異文化コミュニケーションの観点から探求する。

2. 研究の背景

2-1. 異文化コミュニケーション教育・トレーニング

グローバル化が進む中、異文化に遭遇する機会が増えている現在、異文化コミュニケーション能力や、異文化理解能力が様々なところで求められている。異なる文化的背景を持つ人々が、より効果的にコミュニケーションの方法を考察したり、実際にコミュニケーションが取れるようになること、すなわち異文化コミュニケーション能力を養うことが、異文化コミュニケーション教育・トレーニングの目的である。異文化コミュニケーション能力は、様々な枠組みで語られてきたが、代表的なもの1つに Wiseman & Koester (1993) の「文化特定の (cultural-specific)」と「文化一般的 (cultural-general)」の2つの領域があげられる。文化特定のとは、個々の文化に特徴的なコミュニケーションスタイルを理解し使える能力であり、文化特有のマナー、習慣、宗教的ルールなどに応じたコミュニケーションを取ることが望まれる。文化一般的とは、文化の違いにかかわらず、コミュニケーション全般に必要な能力であり、説明力、共感力、自己開示、柔軟性、調整力などがあげられる(石井・久米, 2013, p. 225)。この2つのどちらが欠けても効果的な異文化コミュニケーションは行うことができないが、2つをバランスよく習得していくのは難しい。

異文化コミュニケーション能力を説明している枠組みは上記の他にも多く存在するが、その多くに含まれているのは「認知」「情動」「行動」の3要素である(石井・久米・長谷川・桜木・石黒, 2013, p.208)。

「認知」とは、異文化コミュニケーションにおいて必要とされる考え方や、ものの見方である。例えば、文化の違いに気づくこと、知識を習得すること、どの文化も平等に尊敬されるべきであるとする文化相対的な考え方、多様性の尊重などがあげられる。「情動」とは、異文化コミュニケーション時に起こる、感情や文化に対する態度のことである。具体的には、他者の感じ方を自分の中でも再現できるエンパシー、開放性、相手に対する感情表現、文化に優劣をつけるような判断を保留する力、異文化環境でのストレスに耐える力、感情のコントロールなどがあげられる。「行動」とは、異文化であっても効果的かつ適切なコミュニケーションを取ることができる能力である。場面に応じた適切な役割を行動に移すことができる力、良好な対人関係を築く能力などが含まれる。そして、異文化コミュニケーション教育においては、これら3つに変化をもたらすことが必要であり(Bennett, 1986)、3要素をバランスよく導入することが重要である。楽しさのみが強調され、情動だけが刺激されたり、知識もないままに行動を扱うトレーニングは避けるべきである。

2-2. 短期海外研修の効果に関する先行研究

異文化コミュニケーション教育の有効的な手段として、心と体を使った体験型学習が重視されている。海外研修は、ある期間、日本以外の国に滞在して異文化を経験するまさに体験型学習であり、異文化コミュニケーション教育の場としては非常に適した場所であるといえることができる。海外研修は1年以上の長期のものから、10日前後の短期までさまざまであるが、本研究は短期海外研修に焦点を当てているので、当該分野の日本における先行研究をみてみたい。

まず、英語学習と海外研修の関係については、2~3週間の短期であっても部分的に英語力の向上が見られたとの報告がある。木村(2006)では、3週間のニュージーランド研修参加者に研修前後で英語力の測定を試みたところ、リスニングにおいて向上が見られ、この結果は木村(2011)でも再確認されている。また、木村(2011)ではライティング力についても検証を行ったところ、正確さには変化が見られなかったが、流暢さに伸びが見られた。ライティング力の向上に関しては、Sasaki(2007)でも確認されており、英語を書く動機が向上したことも報告されている。スピーキング力においては、

Hosoki (2013) が、3 週間のアメリカ研修の前後でスピーキング・パフォーマンスを測定したところ、語彙と流暢さにおいて優位な差が認められた。また、スピーキング力測定時のパフォーマンスにおいて、数値には現れなかったがどの参加者も研修前よりも自信をもって話すことができたとしている。田辺 (2012) が行った 6 週間のオーストラリア研修後の調査では、参加者の 80%以上がリスニング力、スピーキング力、コミュニケーションストラテジーが伸びたと思うと答えていた。

英語学習に対するモチベーションや、英語でコミュニケーションをとりたいと思う動機 (Willingness to Communicate=WTC) など、情意面での変化も報告されている。八島 (2009) では、2~3 週間の海外ボランティアに参加した大学生と参加しなかった大学生に対して、WTC、英語で伝える内容があるという意識、英語使用不安、という意識の 3 項目について質問紙調査を行った。その結果、WTC と伝える内容があるという項目の変化においては、ボランティア参加者に伸びが見られ、英語使用に対する不安も、ボランティア参加後には低下していることが認められた。また、参加後に海外滞在時に英語でどの程度伝達できたかについて、話す、聞くを別々に自己評価した結果と、前述の 3 つの要素の間の関係も調査したところ、聞く、話すは共に WTC とは正の相関が、伝える内容があるという意識は、聞くよりも話す能力と高い相関を示した。海外研修において WTC が向上するという報告は、Mishima (2013)、田辺 (2012) にもみられる。

異文化コミュニケーション能力では、藪田 (2011) において、9 日間の韓国研修参加者を対象にアンケート調査を行ったところ、Bennett (1986) のモデルの「認知」「情動」「行動」の 3 要素のうち、認知と情動の変化は見られたが、行動の変化は顕著ではなかったという結果を得ている。さらに、藪田 (2012) では、前年の研究を発展させ、行動を促すコミュニケーション・タスクを研修に取り入れたところ、タスクは現地での交流活動を活発化にし、3 つの領域すべてにおいてプラスの影響をもたらしたことが確認された。

異文化コミュニケーション能力については、アンケートの自由記述やインタビューなどから質的に研究したものも見られる。中川 (2009) は、23 日間のアメリカ研修参加者が、研修を通してどのような気づきを獲得したのかについて分析を行っている。参加者 3 名のインタビュー調査結果を、PAC 分析 (個人別態度構造) の手法を使って分析を行い、32 項目を得た。それらの項目を、Bennett (1986) の枠組みである、認知、情動、態度・行動変容の観点で分類したところ、認知 14 項目、情動 8 項目、態度・行動変容 11 項目が得られた。認知には、違い、出会い、ホスピタリティ、家族の大切さ、語学力の大切さ、コミュニケーションの大切さなどが含まれており、「違い」に関する気づきが全員に見られた。情動では、感謝、友情、愛情、驚き、緊張感、満足感、楽しさ、態度・行動変容には、成長、努力、勇気、興味、受け入れ、積極性などが含まれていた。また、クラスター分析のデンドログラム上の各項目に対する参加者のイメージはほとんどがプラスイメージであり、参加者が研修に対して肯定的な感情を持っていたことも明らかになった。

小林 (2013) は、約 1 ヶ月の韓国研修参加者 6 名が帰国後作成した報告書の分析を基に、研修からの学びの多面的な分析を試みた。報告書から学生の「学び」に関する記述を抽出し、KJ 法を用いてカテゴリー化を行った結果、語学力の上達、困難の克服、学習上の工夫・努力、学習に関する刺激とモチベーション、異文化体験、自分の将来、他大学や現地学生との交流、海外志向、歴史問題・歴史認識の 9 つのカテゴリーを得ている。これらのカテゴリーに分類された記述から、短期海外研修は、語学学習の有効性、異文化を通じた学びや交流の効果、歴史問題への気づきなど、異文化環境がプラスに影響していることが確認された。また、研修中には問題や困難に対して、自ら積極的に動いて問題を解決したり改善行動をとったりと、学生の主体性を養う機会や、相手と交渉したり、積極的に交流

する場面も多く記述されていた。これらは、いわゆる社会人基礎力にあたり、海外研修は単に語学や異文化体験の場所ではなく、社会人としての基礎を養成する1つの機会としてとらえることも可能であることを示唆している。このような質的分析では、量的分析では拾いきれない参加者の変化や学びに焦点をあてることができ、研修内容をより深く詳しく検証するには効果的であると考えられる。

以上、先行研究から短期海外研修の効果や学びについての概観を得た。その上で本研究は、異文化コミュニケーション能力の観点から見たときに、参加者は短期海外研修から何をj得ているのかを、質的データ分析を通して明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

研究対象のプログラムは、2012年および2013年に行われた台湾研修である。プログラムの目的は、台湾の文化を体験するとともに、台湾の姉妹校の学生と英語を使って交流し、世界共通語と言われている英語を実感することであった。どちらの学生も日本語もしくは中国語専攻の学生ではなかった（両国学生とも主に英語専攻の学生）英語がお互いの共通言語であり、すべてのプログラム、コミュニケーションは英語で行われた。実際のプログラム内容は表1のとおりで、宿泊はキャンパス内のゲストハウスであった。キャンパスでの授業終了後は、夜市や市街へ台湾人学生と一緒に出かけ、フィールドトリップは日本人、台湾人学生と一緒に宿泊をしたので、プログラムを通して現地学生と交流の機会は豊富にあった。また、事前研修として、4回のセッションが実施され、現地での心得や渡航に関する情報などの事務手続きに加え、英語学習、異文化間コミュニケーションについても学習した。

表1 台湾研修現地プログラム内容

内容	
Day 1	日本から台湾へ
Day 2	オリエンテーション, English Workshop, 台湾の伝統文化講義
Day 3	English Workshop, 台湾伝統クラフト, 観光中国語ワークショップ
Day 4	台湾語書道, 台湾伝統遊び講義と実習, 台湾映画鑑賞
Day 5	フィールドトリップ 墾丁国立公園訪問
Day 6	フィールドトリップ 墾丁国立公園訪問
Day 7	最終プレゼンテーション準備
Day 8	最終プレゼンテーション, 修了式
Day 9	台湾から日本へ

調査対象は、長野県の短期大学の2年生で、2012年度16名、2013年度13名、出発時の英語力は英検準2級～2級程度であった。本学では海外研修後にはすべての研修において、実施内容、運営体制などに関するアンケート調査を実施しており、今回対象にしている台湾研修に関して毎年満足度は非常に高い（5点満点で4.5点以上）。しかしながら、参加者は何を学び、何をj得てきたかについては詳細な調査が行われていなかった。そのため、今回は数値のみのアンケートでは得ることのできない参加者の実態を探索する手段として、研修後に参加者が提出する「海外研修報告書」の中の、「この研修を通してj得たこと、学んだこと」の章で記述されているテキストを分析することにした。29人全員

が報告書を提出しており、個人によって多少のばらつきはあったが、平均語数は389語 ($SD = 107$, 最長738語, 最短169語) であった。

分析の手順は、まず「この研修を通して得たこと、学んだこと」の全記述の中から、学びや得たものと判断できる記述を書き出してセグメント化し、コーディングを行った。その後、コーディングしたものの共通点を見出し、上位概念としてグルーピングする焦点的コーディング(佐藤, 2009)を行い、カテゴリーに分類した。最後にそのカテゴリーを Bennett (1986) および石井・久米 (2013) の異文化コミュニケーション教育における3要素、すなわち「認知」「情意」「態度・行動」の3つ領域に当てはめて分析を行った。それぞれの領域の下位要素は、山岸・井下・渡辺 (1992), 中川 (2009), 小林 (2013) を参考にしつつ表2のように決定した。

表2 異文化コミュニケーション教育の観点での領域と下位要素

認知	理解, 新しい知識の習得, 気づき, 考え方, 視野, 判断保留 等
情意	感受性, 受容性, 柔軟性, 感謝, 驚き, オープンネス, 楽しさ, 辛さ 等
態度・行動	コミュニケーション, 対人関係構築, 積極性, スキルの習得, 肯定的な態度 等

4. 結果と考察

4.1 カテゴリーとコードの集計結果

研修参加者29名の報告書の「この研修を通して得たこと、学んだこと」記述の中から、学びや得たものとして付与されたコードの総数は141, カテゴリー総数は18であった。それを3つの領域に分類した結果は表3のとおりであり、それぞれのカテゴリーで代表的だったコードも合わせて示している。認知領域が10カテゴリー, 情動が5カテゴリー, 態度・行動は3カテゴリーであり、認知に分類されたものが一番多かった。カテゴリーの横の()内の数字は、そのカテゴリーに属するコードの数である。コード, カテゴリーについて検討したところ, 次のような知見を得た。

各領域のコード数の全体に対する割合をグラフにしたところ, 図1のようになった。認知がやや多いが, 3つの領域がほぼ同じ割合であることがわかる。このことから, この研修は, 異文化コミュニケーション教育の3領域でバランスよく参加者に学びを提供していることがわかる。また, 参加者の3つの領域における記述を観察したところ, 認知領域のカテゴリーに属する記述がなかった者が9名, 情動は1名, 行動は9名という結果であった。情動に関してはほぼ全員が記述しており, この研修プログラムは参加者の情動に変化をもたらすものであったといえる。この結果は藪田 (2011) を追認するものとなった。

図2で各領域におけるカテゴリー数を比較してみると, 認知領域が55%と約半数を占めているのに対し, 情動領域が28%, 態度・行動領域が17%と少なくなっている。このことは, 情動や態度・行動に関しては, 参加者が同じような学びを感じていたのに対し, 認知領域では, 得たものが個人個人で異なっていたことを意味している(詳しい説明は4.2にて行う)。情動のカテゴリーは, 対人関係からもたらされるものがほとんどで, 交流の濃さを物語っている。態度・行動のカテゴリーでは, 積極性と英語力の向上という2つの変化を見ることができた。積極的にコミュニケーションを取ること(行動)によって, 台湾人学生の温かさに触れて感謝する気持ちがわき(情動), さらにコミュニケーションが活発になること(行動)によって, 台湾人学生との間に友情が育まれていく(情動)。ここに, 行動と情動の密接な関連を見ることができる。行動したことにより生まれる情動が肯定的なものであれ

ば、それが新たな行動を生み出すサイクルが働いていると考えられる。

表3 カテゴリーとコードの詳細

認知	<p>1) 英語学習の必要性 (16) 自分の英語力の無さに気づく、もっと英語ができるようになりたい、英語ができないとコミュニケーションは難しい</p> <p>2) 知識の広がり (12) 台湾の学生生活、台湾の文化、生活習慣、中国語の知識</p> <p>3) 共通語としての英語の気づき (8) 世界共通語の英語を実感、英語を使ってつながる実感</p> <p>4) 台湾人学生の英語力の高さ (4)</p> <p>5) 伝える気持ちの大切さ (4) 言葉以上に気持ちが大事、ジェスチャーも使って伝える工夫をする、間違えてもいいから伝えようとする</p> <p>6) 自文化理解の大切さ (3) 日本についてきちんと説明できること</p> <p>7) 英語の違い (2) 台湾人の英語の発音やイントネーションの違い</p> <p>8) 自文化の良さ (2)</p> <p>9) 視野の広がり (2) 前には見えなかったことが見える</p> <p>10) ステレオタイプの気づき(1)</p>
情動	<p>1) コミュニケーションの楽しさ (15) 相手に伝わったうれしさ、英語を使って会話する楽しさ、異文化交流の楽しさ、共感できる喜び</p> <p>2) 人の温かさ (13) 台湾人学生のやさしさ、台湾人学生のホスピタリティ</p> <p>3) 話せない、伝わらない悔しさ (11) 言いたい事が英語で言えない、もっと英語力があつたらと思った、自分に自信がなくて話せなかった</p> <p>4) 台湾の友人を得た喜び (8) もう一度みんなに会いたい、国を越えて仲良くなれた、ずっと連絡を取り合いたい</p> <p>5) 自分をオープンにする</p>
態度・行動	<p>1) 積極性 (20) 台湾の学生に積極的に話しかける、どんどん質問をした、何事にもチャレンジする、勇気をもって行動に移す</p> <p>2) 英語力の向上 (15) 英語力に自信が持てた、英語力が向上した、自然と単語が出るようになった</p> <p>3) 新たな挑戦・興味 (5) 中国語も学びたい、もっと海外に行きたい、他の国のことも知りたい</p>

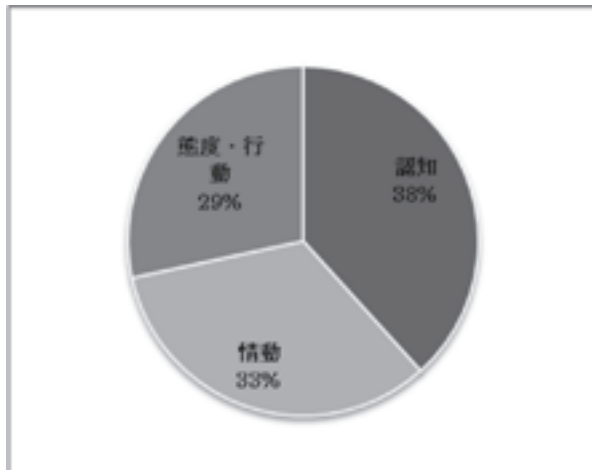


図1 領域別コード数

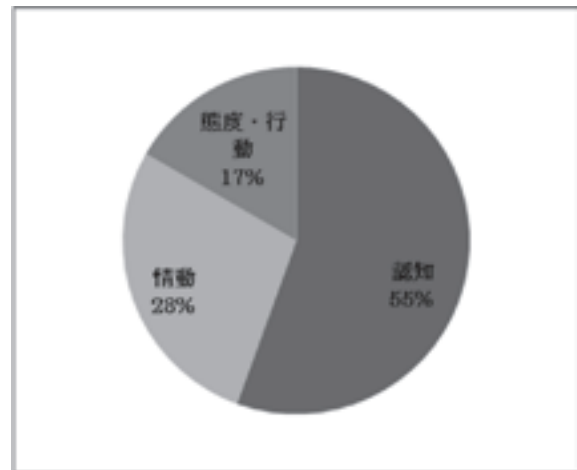


図2 領域別カテゴリー数

最後に、すべてのカテゴリーを、そこに含まれるコード数で表したものを図3に示す。最も多くコーディングされたのは「積極性の向上」に関する記述であり、「英語学習の必要性」「英語力の向上」「コミュニケーションの楽しさ」が続いた。この結果から、この研修を通して参加者は、台湾人学生と積極的にコミュニケーションをとり、その結果として英語力の向上を実感した。また、英語でコミュニケーションをする中で、自分の力不足を感じたことにより、さらなる英語学習の必要性を感じたということができるだろう。

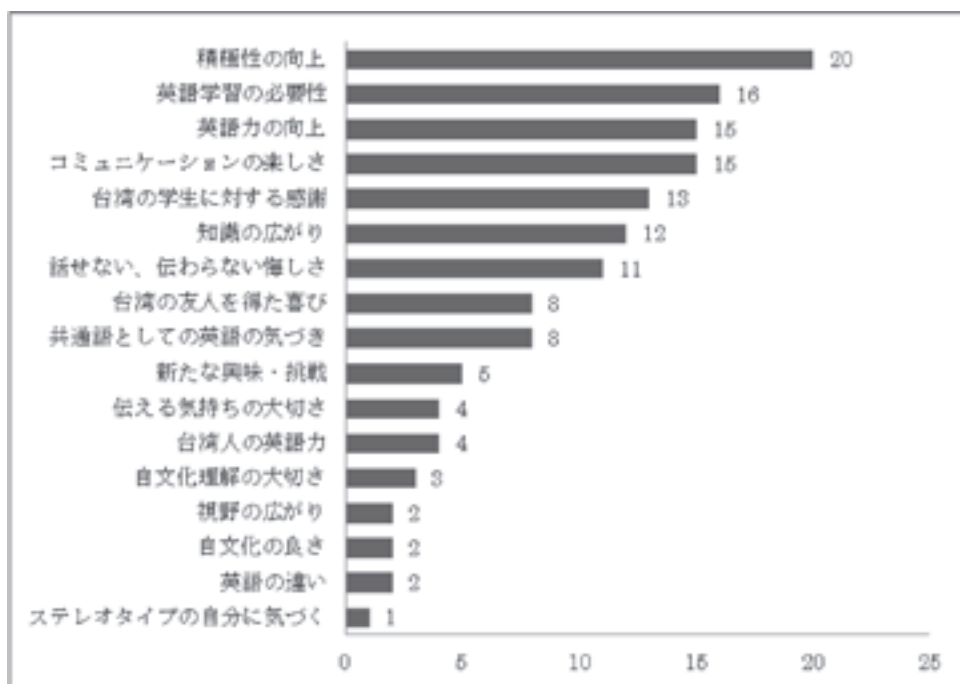


図3 カテゴリーごとのコード数

4.2 カテゴリーと具体的記述から見られる参加者の学び

ここからは、図3より読み取れる参加者の学びを、実際の記述を示しながら見ていきたい。事例の記述はほぼ原文のままであり、() は文章の流れから筆者が加えたものである。

4.2.1 英語力の向上と英語学習の必要性

多くの参加者は台湾研修を通して、英語学習の必要性を痛感したことがあげられる。交流の中で、台湾人学生の英語力が非常に高かったことに刺激を受けた参加者も見受けられた（事例 A）。純粋に英語でのコミュニケーションを楽しんでいる参加者もいたが（事例 B）、英語でコミュニケーションを取ろうとはするものの、話せない、伝わらないという悔しさを味わった者も多かった（事例 C）。だがその悔しさと、世界でコミュニケーションする場合には英語が共通語になることにも気づき、英語学習の必要性を認識していく様子も観察できる（事例 D, E）。また、滞在を通して英語でコミュニケーションを取ったことで英語力の向上を実感したという記述も多くあったことは、研修の成果であるといえるだろう（事例 F）。

事例 A 台湾の学生は英語専攻関係なく、英語をしゃべれる人がほとんどでした。日本だと、英語関係の勉強をしている人しか英語は話せない言語だと思っていました。しかし、英語専攻の人と同じくらい流暢に話をしていて、英語コースを選択しているのに、自分が少ししか話せないことが悔しいと感じました。

事例 B 今回の研修で初めて英語で話していて楽しいと思うことができました。

事例 C（台湾の）学生との会話の中で、自分が思っていることを英語に訳せず、何度ももどかしさを感じる時があり、もっと英語ができるようになりたいという気持ちが持てました。

事例 D 私が今まで英語で会話してきたのはほとんど英語を母国語としていた人達だ。だが、台湾の学生たちも私たちも母国語が英語ではない。（中略）これからの日本の相手はアジアにある。そこで使われるのは英語だ。その共通語としての英語を実感することができたし、日本もネイティブが話す英語だけに対応していだけでは足りなくなっていると思った。

事例 E 学んだことは、英語が共通語だと改めて感じたことです。台湾の学生は台湾語、日本の学生は日本語で、お互い母語は違います。しかし、お互い英語を使ってコミュニケーションを取ることができます。言語も文化も違いますが、英語だけは世界共通の言語です。この英語を使って、もっと世界の人とつながりたいと強く感じました。これからも英語を学び続けていきたいです。

事例 F 向こうの授業は英語で行われ、台湾の学生と接するときは英語で接するので、常に英語を使わなくてはならない環境にいたことで、英語の難しさを身に染みて感じたと同時に、以前よりも自分の英語力が向上したと感じた。

研修を通して、かなり集中的に英語に触れたので、英語力が向上したと実感を持った学生も多くいた。また、もっと英語を勉強したいと思った学生は非常に多い。「もっと英語ができれば、もっと親しくなれたのに。これからもっとがんばりたい」という記述も多く、英語学習に対する動機の高まりが見えた。同じ期間を大学の教室内で過ごしていても、このような動機を生み出すことは難しい。これは海外研修ならではの効果的な動機づけであるといえることができる。しかしながら、この動機をどうやって持続させるかには課題も多い。帰国後、この学習動機を持ち続け、実際に英語学習につなげて

いくにはどのようなことが必要なのか。これは今後取り組まなくてはならない課題である。

4.2.2 コミュニケーションに対する積極性

「積極性の向上」は、最も多くコーディングされた記述であり、参加者が台湾人学生と積極的にコミュニケーションを取ろうとしてこと、積極的に行動を起こしていたことが読み取れる。それは、英語を話すことと(事例 G)、新しい文化に挑戦しよう(事例 H)という両方の側面で見ることができる。また、積極的に英語を話そうというときに、語学力以上に伝えようとする気持ちも大切であるということにも気づいている(事例 I)。積極的に台湾人学生とコミュニケーションを取っていった結果、コミュニケーションが楽しいと感じる参加者が多かった(事例 J)。

事例 G この研修で、私は積極性を身に着けることができたと思う。私はいつも自分に自信がなく、英語で何か話すときにも間違っていたらどうしようと思ってしまうことが多い。しかし今回の台湾研修は、常に台湾の学生たちが私たちのお世話をしてくれていたのので、日本人だけかたまって行動してしまうことも少なく、台湾の学生たちとたくさん英語で話をする機会があった。たくさん話すには、自信がないにかかわらず、英語をひたすら聞いて自分でも口にするという行為が必要になってくる。ここから私は積極性を身に着けることができたのだ。

事例 H それに台湾で見えるものすべて珍しかった私は、台湾の学生たちに「これ何?」とか「中国語でなんというの」など、どんどん質問した。

事例 I この研修を通して、たとえ文法が少し違う英語でも、一生懸命伝えようとすれば、相手も理解してくれようとするため、伝えようとするのが大切だと学んだ。

事例 J 台湾の学生も英語が母語ではないので、改めて第二言語を通して会話をし、コミュニケーションを持つことの楽しさと素晴らしさに改めて気づきました。

台湾人学生との英語でのコミュニケーションにおいては、コミュニケーションを取りたいという態度、すなわち WTC が向上したとすることができるであろう。参加者の中には、前章の事例 Eにあるように、英語を使ってもっと色々な人とつながりたいという気持ちが生まれている。海外研修における WTC の向上は先行研究(八島, 2009, 田辺, 2012, 三島, 2013 等)でも確認されており、短期研修であってもその有効性が示されている。今回の研究は、質問紙を使用して WTC そのものを測定する調査は行っていないが、これらの研究と同様の結果を得ることになった。前章でも述べたが、これらの動機をどのように持続させ、さらには英語学習に結び付けていくかということが課題としてあげられるだろう。そのための施策は今後大いに検討を進めていくべきであると考えられる。

4.2.3 新たな知識の習得

台湾という日本とは異なる文化で、参加者は多くの違いに気づき、知識を得ていた。台湾を訪れるのは初めての参加者がほとんどであったため、新しい文化から多くの刺激を受けたようである。具体的には、台湾の生活習慣(事例 K)、学生の生活(L)、中国語・台湾語の習得(事例 M, N)などがあがっており、それらがさらなる新しい興味を引き起こしていたことにも注目したい。

事例 K 現地には日本のデパートがあったり、日本の食べ物が台湾でもたくさん売られていたりしたから驚いた。特に、食については驚くことが多かった。台湾料理はすべて辛いというイメージを持っていたが、砂糖がたくさん使われていて、お茶やラーメンまで甘かった。それが昔からの伝統であり、裕福の象徴だということを知り、日本にいたらそういう伝統にも触れることができなかったから、よい機会になったし、海外に関する知識が増えた。

事例 L 台湾の男子学生は大学卒業後 1 年間兵役にいくということと、就活は大学在学中にはやらず、卒業してから就活をすることが普通ということを学びました。日本と違うところが意外とたくさんあることに驚き、9 日間でたくさんのごとを得ることができました。

事例 M 英語だけでなく、授業や台湾の学生と交流したことで、台湾語も学ぶ事ができた。

事例 N ナイトマーケットなどで値段が聞き取れたとき、台湾の学生に台湾の母語である中国語（台湾語）を教えてもらったときに、中国語を学びたいと新しい興味を持つこともできました。

参加者は様々なところで違いに気づき、新しい文化を学んでいるが、記述を観察してみるとそれらは外部の観察者にも容易に気が付くことのできる「表層的文化」（石井・久米, 2013）である場合が多く、価値観やその文化を構成する精神的・心理的な構成要素を含む「深層的文化」の気づきには至っていない。これは、滞在期間によるところが大きく、アドラー（1975）の「異文化への移行体験の諸相」においても、深層的文化が理解され受け入れられるのは、もっとも最後の段階とされている。今回は9 日間とかなり短期間の滞在であったため、表層的文化の気づきに止まったと考えられるが、深層的文化にやや触れていると思われる記述が1 つだけあった。事例 O は、台湾での交流を通して、自分のステレオタイプの価値観に気づいたという事例である。

事例 O アジアに対する考え方が変わった。日本人はニュースなど報道の影響で、ほかのアジアの国を知ろうともせず、嫌いだと思っている人は少なからずいると思う。だが、それは違うとはっきりこの研修でわかった。台湾にいる間はみんなとても優しく、面倒を見てくれて感謝している。私も（反日運動の）報道などの影響で最初に行くのに戸惑いを感じたが、それはただのステレオタイプな考えだと気付いた。

これは 2012 年の参加者で、研修前の何ヶ月かは、中国で活発な反日運動があり、それが台湾でも見られた時期であった。テレビなどの報道から彼女の中には、台湾に対してネガティブなイメージがあったことが想像できる。しかしながら、実際にはそのような思いを払拭するような温かい交流をすることができ、考え方が変わったと自ら認識できるまでになっている。このように、深層的な考え方にまで変化をもたらすことができれば、海外研修は大きな役割を果たすと考える。今後は少しでも深層文化まで感じられるような取り組みも取り入れる必要があるだろう。この取り組みができた時に、楽しいだけに終わらない、深い学びができるのではないだろうか。

4.2.4 自文化理解の重要性

海外に行くことによって、異文化知識が増えるのと同時に、自文化理解の大切さに気付く参加者も少なくない（事例 P）。事例 Q のように、滞在中に日本のことについて聞かれたことに対し、十分に答えられなかった経験から、このように考える参加者もみられた。

事例 P 異文化を知る楽しさにも改めて気づくとともに、日本の自文化にも目を向け、理解し、日本についてよく知って、伝えることの大切さと難しさも学びました。

事例 Q 外国人に聞かれてもいいように、もっと自分の国のこともちゃんと知っておかなければならないと思った。聞かれても恥ずかしくないようにしたい。

海外滞在を通して、自文化理解の必要性に気づくことは珍しいことではない。お互いに知り合おうと思えば、相手の文化に対して興味を持つからである。今回交流した台湾人学生の多くが、日本の文化に非常に興味を持っており、日本人学生に対して質問を投げかけている場面を頻繁に目にした。日本人学生は語学の問題もあるのだが、そもそも知識を持っていないことが多いように感じられた。普段の生活では当たり前を感じていることが、異文化交流を通してそれが当たり前でないということを感じ、自文化を見つめ直す重要な機会となっていることがわかった。

4.2.5 台湾人学生のホスピタリティ

研修の全日程を通して台湾人学生の手厚いもてなしを受け、多くの学生がそのホスピタリティの高さに感動し、感謝の言葉を記している（事例 R, S）。また、自分が受けたもてなしに感謝するとともに、台湾人学生を見習って、周りに親切にしたいと書いている参加者もいた（事例 S）。

事例 R 台湾の学生は、本当に何から何まで、私たちに尽くしてくれた。どこに行くにも必ずついてきてくれ、わからないことがあればすぐに教えてくれて、みんなとても優しく、フレンドリーだった。また絶対行きたい。

事例 S 毎日朝から晩まで大学のみんなと交流して、国が同じなのではと思うほど仲良くなれたと思う。今現在も交流がある大切な友人を得られた。友人が言った *You are my first Japanese friend* という言葉が忘れられない。

事例 T 台湾の人々は親切で本当に優しくかった。台湾の学生は次の日が学校であっても夜遅くまで私たちに付き合ってくれて、心から感謝したい。おもてなしの心が身についているのだと思う。国境の垣根を越えて、また情勢の壁を越えて親切にしてくれた台湾の人々を見習って、私ももっと周りに親切心を持たなくてはと思った。

台湾人学生のホスピタリティは、参加者の情動に大きな影響を与えた。そして、彼らとの交流があったからこそ学べたことは多い。お互いに積極的にコミュニケーションをとったからこそ、上記の事例が示すような感情を持ったのだと思われる。この点が、単なる海外旅行、もしくは現地の人との交流の少ない、視察型の研修とは異なる点である。異文化コミュニケーション教育の観点から見れば、

交流活動が多く含まれている方が参加者の学びは大きくなる。しかし、そのためには、周到的な準備が必要であり、そこには文化特定の知識はもちろんのころ、文化一般的コミュニケーション能力や、自己開示の方法、自分の意思を伝える方法などが含まれ、事前研修の重要性を再認識する必要があるだろう。

以上、5つの学びを見てきたが、これらをまとめてみると、「異文化交流や外国語学習に対する動機の向上」と、「新しい知識の習得による考え方の変化」とすることができるように思う。動機の向上としては、英語学習とコミュニケーションを取りたいという2つが観察された。英語に集中的に触れることにより、英語力の向上を実感すると同時にもっとできるようになりたいという英語学習に対する動機が生まれた。また、積極的に台湾人学生とコミュニケーションをとっていく中でその楽しさを味わい、もっと関わりたいというコミュニケーションそのものに対する動機も生まれていった。繰り返すことになるが、これらの動機をどのように持続させ、実際の行動に移すかは今後の課題である。

知識の習得としては、参加者にとっては異文化である台湾の文化や中国語・台湾語を学んで、視野が広がったと同時に、今まで自分が思ってきたことはステレオタイプの考え方であったことに気が付く段階に進むことも可能にしている。そして、異文化を吸収すると同時に、自文化理解の重要性にも気が付き、2つの文化を比較してみる思考も生まれていることがわかった。

5. まとめ

本研究では、2012年、2013年に台湾研修に参加した学生29名の海外研修報告書の記述をもとに分析を行い、参加者がどのようなことを学んでいたのかを、異文化コミュニケーション教育の視点を交えて検証した。

参加者の記述に対してコーディングを行い、カテゴリーに分類したところ141コード、18のカテゴリーが得られた。得られたコードを異文化コミュニケーション教育の、認知、情動、態度・行動の3つの領域に当てはめてみたところ、3つの領域がほぼ同じ割合であり、研修からの学びはバランスのとれたものであったことが明らかになった。その中でも情動についてはほぼ全員が報告書に記述していたことから、当該研修は参加者の情動に変化をもたらすものであったことが明らかになった。さらにカテゴリーで分類を行うと、他の2領域に比べて認知領域が多く、この領域の学びがバラエティーに富んでいたことがわかった。得られたコードと実際の記述から参加者の学びを検証したところ、英語力の向上と英語学習の必要性、コミュニケーションに対する積極性、新たな知識の習得、自文化理解の重要性、台湾学生のホスピタリティの5つの分野が明らかになった。このことから、短期海外研修であっても、異文化交流や英語学習に対する動機の向上と、新しい知識の習得による考え方の変化はもたらすことができるということが考えられる。

今後の課題は多くあるが、次の2つをあげたい。1つ目は、研修を通して得られた動機の継続と、そこから次のステップへの移行である。海外で実際に英語を使ってみることで一時的に生まれた動機も、そのままでは消滅してしまうことは明らかである。動機を実際の学習につなげて行く授業内外での取り組みを考えていきたい。もう一つは、学びの質を深めることである。短期研修の枠組みではできることは限られている。滞在時間を劇的に伸ばすことは難しいが、より深い学びに導くための事前、事後の活動は非常に重要である。そのような取り組みを重ねていくことで、表層的文化のみではなく、深層的文化にある学びに至ることができ、人間的に成長していくことが異文化コミュニケーション教育の最終的な目標である。そのためには、短い期間であっても日本を出て異文化に触れて生活することが、参加者の重要な学びの機会になっており、ここをステップとして、長期研修やさらなる異文

化交流活動に参加するようになってくれることを願っている。

引用文献

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology, 15*, 13-23.
- Bennett, J. (1986). Modes of cross-cultural training: Conceptualizing cross-cultural training as education. *International Journal of Intercultural Relations, 10*, 117-134.
- Brislin, R. W., Landis, D., & Brandt, M. (1983). Conceptualizations of intercultural behavior and training. In D. Landis & R. W. Brislin (Eds.), *Handbook of intercultural training, volume I: issues in theory and design* (pp. 1-34). New York: Pergamon Press.
- Brislin, R. W., & Yoshida, T. (1994). *Intercultural Communication Training: Introduction*. London: Sage Publications
- Hosoki, Y. (2013). The effects of study-abroad experience on speaking performance : The case of a three-week English study abroad program for Kyushu International University students. *Kyushu International University Kokusai Kankeikeigaku Ronshu, 8*, 1-35.
- 石井敏・久米昭元 (編). (2013). 『異文化コミュニケーション事典』 横浜：春風社.
- 石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊之・石黒武人 (2013). 『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて—』 東京：有斐閣選書.
- 木村啓子 (2006). 「英語圏滞在が学生の英語力の及ぼす影響：短期語学研修により英語力は向上するか」 『尚美学園大学総合政策研究紀要』 12, 1-20.
- 木村啓子 (2011). 「大学の海外短期研修の効果への一考察—リスニングとライティングに焦点をあてて—」 『尚美学園大学総合政策研究紀要』 21, 17-30.
- 小林文生 (2013). 「短期海外研修による教育的効果の再検討：学生の報告書の多面的な分析を通して」 『一橋大学教育研究開発センター 人文・自然研究』 7, 162-185.
- Mishima, Eriko. (2013). Japanese students' social interactions during a study abroad program: Its characteristics and relations to their willingness to communicate in English, *Kokusai Ningengaku Forum, 9*, 27-41.
- 文部科学省 (2013). 「これからの大学教育の在り方について (第三次提言)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/attach/1338229.htm
- 中川典子 (2009). 「短期海外研修における参加者の気づき—異文化理解教育の観点から」 『流通科学大学論集—人間・社会・自然編』 第21巻第2号, 31-60.
- Sasaki, M. (2007). Effects of study-abroad experiences on EFL writers: A multiple data analysis. *The Modern language journal, 91*, 602-620.
- 佐藤郁哉 (2008). 『質的データ分析法—原義・方法・実践』 東京：新曜社.
- 田辺尚子 (2012). 「短期海外研修での All in English の授業が学生の情意的側面に与える影響」 『安田女子大学紀要』 30, 19-26.
- Wiseman, R. L., & Koester, J. (Ed.). (1993). *Intercultural communication competence*. Thousand oaks, CA: Sage.
- 藪田由己子 (2011). 「異文化交流プログラムにおける意識調査—韓国と日本の大学生のケーススタディー—

を通して」『清泉女学院短期大学研究紀要』30, 47-61.

籾田由己子 (2012). 「短期海外研修におけるコミュニケーション・タスクを用いた異文化交流プログラムの試み」『清泉女学院短期大学研究紀要』31, 62-78.

山岸みどり・井下理・渡辺文生 (1992). 「『異文化間能力』測定の試み」『国際化と異文化教育－日本における実践と課題（現代のエスプリ 299, pp. 201-214）』東京：至文堂.

八島智子 (2009). 「海外研修による英語情意要因の変化：国際ボランティア活動の場合」. *JACET Journal*, 49, 57-69.

SUMMARY

The aim of this study is to examine the outcome of a short-term study abroad program from the intercultural communication point of view. The data was collected from the 29 students who participated in the Taiwan program where they had to use English as a means of communication. One of the sections in the written report, “what did you learn from this program?”, was analyzed qualitatively and the results were used to explore and assess the outcome of the students’ intercultural communicative competence. From the